

# 多様体上の構造保存型スキーム

竹田航太

2022年3月14日

## 目次

1	概要	1
2	多様体上の微分方程式系	2
2.1	Constrained Mechanical System . . . . .	2
2.2	Hamilton Formulation . . . . .	3
3	スキーム	3
3.1	Standard Projection . . . . .	3
3.2	Symmetric Projection . . . . .	4
3.3	Symplectic Integration / RATTLE . . . . .	4

## 1 概要

多様体上の微分方程式の離散化において、系の保存則や対称性などの構造を離散化後も保つスキームを整理する。最も基本的な構造は点が多様体上にあり続けることである。その次に対称性や Symplectic 性などの構造が考えられる。これらの構造をもつ方程式系を考え、離散化後も一部または全部の構造を保つスキームを順にまとめる。

本稿は主に [1] を参考にしている。また、多様体上の Hamiltonian Monte Carlo を考える際の必要性からこのようなスキームについて整理している。

多様体上のスキームについて以下を扱う。下に行くほど方程式系のより多くの構造を保つ。

- (1) Standard Projection [1, IV.4]
- (2) Local Coordinates Method [1, IV.5]
- (3) Symmetric Projection [1, V.4]
- (4) Symplectic Integration / RATTLE [1, VII.1]

## 2 多様体上の微分方程式系

2つの自然数  $d > m \in \mathbb{N}$  について、滑らかな関数  $g: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}^m$  の零点で表される多様体  $\mathcal{M}$  を考える.

$$\mathcal{M} = \{y \in \mathbb{R}^d \mid g(y) = 0\}$$

いま,  $\mathbb{R}^d$  上の微分方程式

$$\dot{y} = f(y) \tag{2.1}$$

について

$$y(0) \in \mathcal{M} \Rightarrow \forall t, y(t) \in \mathcal{M} \tag{2.2}$$

という条件を考える. いま,  $g$  のヤコビアンを  $g'$  とかくと (2.2)  $\Leftrightarrow g'(y)f(y) = 0, \forall y \in \mathcal{M}$  が成り立つ. この条件を満たす  $g$  を weak invariant という. より強い条件として invariant (first integral) がある. (2.1) に対して, 任意の  $y \in \mathbb{R}^d$  で

$$I'(y)f(y) = 0$$

が成り立つ  $I: \mathbb{R}^d \rightarrow \mathbb{R}$  を (2.1) の first integral または invariant という.

以降, 多様体上の微分方程式系について  $g$  が weak invariant となることを仮定する.

### 2.1 Constrained Mechanical System

Lagrange 形式で多様体上の方程式系を書く. 多様体の記号を変える.  $Q = \{q \in \mathbb{R}^d \mid g(q) = 0\}$  ( $q_1, \dots, q_d$ )  $\in Q$  に対して, 運動エネルギー  $T(q, \dot{q}) = \frac{1}{2}\dot{q}M(q)\dot{q}$ , ポテンシャル  $U(q)$  を考える. Lagrangian を次のようにおく.

$$L(q, \dot{q}) = T(q, \dot{q}) - U(q) - g(q)^\top \lambda. \tag{2.3}$$

ただし,  $\lambda = (\lambda_1, \dots, \lambda_m) \in \mathbb{R}^m$  は Lagrange 未定乗数である. 多様体上という制約の下で Euler-Lagrange 方程式は次のように書ける.

$$\begin{cases} \dot{q} = v \\ M(q)\dot{v} = f(q, v) - G(q)^\top \lambda \\ 0 = g(q) \end{cases} \tag{2.4}$$

ただし,  $f(q, v) = -\frac{\partial}{\partial q}(M(q)v)v + \nabla_q T(q, v) - \nabla_q U(q)$ ,  $G(q) = \frac{\partial g}{\partial q}(q)$  とおいた.

(2.4) は,  $\text{rank } G(q) = m$  で  $M(q)$  が  $\ker G(q)$  上で可逆であるときに  $\lambda$  を消去して,  $q, v$  についての ODE に帰着できる. 解の構成の詳細については [1] の VII.1 を見よ.

次に多様体の接バンドル上の微分方程式として Euler-Lagrange 方程式 (2.4) を書き直す。 $q \in Q$  に対して、接空間を  $T_q Q = \{v \mid G(q)v = 0\}$  で定める。また、接バンドルを  $TQ = \{(q, v) \mid q \in Q, v \in T_q Q\}$  で定める。(2.4) は初期値  $q_0, v_0 \in TQ$  に対して  $TQ$  上の ODE として書ける。

## 2.2 Hamilton Formulation

(2.4) を Hamilton 形式で書き直す。速度  $v = \dot{q}$  の代わりに運動量  $p = \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} = M(q)\dot{q}$  を導入する。(2.4) は次のように書ける。

$$\begin{cases} \dot{q} = H_p(q, p) \\ \dot{p} = -H_q(q, p) + G(q)^\top \lambda \\ 0 = g(q) \end{cases} \quad (2.5)$$

ただし、Hamiltonian を  $H(q, p) = \frac{1}{2}p^\top M(q)p + U(q)$  とおいた。第 3 式を時間で 2 回微分すると

$$0 = G(q)H_p(q, p) \quad (2.6)$$

$$0 = \frac{\partial}{\partial q}(G(q)H_p(q, p))H_p(q, p) - G(q)H_{pp}(q, p)(H_q(q, p) + G(q)^\top \lambda) \quad (2.7)$$

となるので

$$G(q)H_{pp}(q, p)G(q)^\top \text{が可逆.} \quad (2.8)$$

を仮定すると  $\lambda$  は  $(q, p)$  を用いて表せる。この条件 (2.8) は前節での ODE への帰着条件が成り立てば成り立つ。

次に多様体上の Hamilton 形式を余接バンドル上の ODE として書き直す。まず、 $\lambda$  を消去すると (2.5) は次の  $\mathcal{M}$  上の ODE として書ける。

$$\mathcal{M} = \{(q, p) \mid g(q) = 0, G(q)H_p(q, p) = 0\} \quad (2.9)$$

$$\begin{cases} \dot{q} = H_p(q, p) \\ \dot{p} = -H_q(q, p) + G(q)^\top \lambda(q, p) \end{cases}$$

この多様体  $\mathcal{M}$  は実は  $Q$  の余接バンドルである。 $q \in Q$  に対して、余接空間を  $T_q^* Q = \{M(q)v \mid v \in T_q Q\}$  と定める。さらに、余接バンドルを  $T^* Q = \{(q, p) \mid q \in Q, p \in T_q^* Q\}$  と定めると  $\mathcal{M} = T^* Q$  であることが簡単な計算でわかる。

## 3 スキーム

### 3.1 Standard Projection

[1, IV.4] 単に  $q(t) \in Q$  を保つ。

### 3.2 Symmetric Projection

[1, V.4] (時間反転) 対称性を持つ微分方程式に対して, 対称なスキームを応用して  $q(t) \in Q$  と対称性を保つ.

### 3.3 Symplectic Integration / RATTLE

[1, VII.1] 多様体上の Hamilton 方程式に対して,  $(q(t), p(t)) \in T^*Q$  を保ちかつ symplectic 性と対称性も保つ.  $(q_n, p_n) \in \mathcal{M}$  に対して, 次のように定義する.

$$\begin{cases} p_{n+\frac{1}{2}} &= p_n - \frac{h}{2}(H_q(q_n, p_{n+\frac{1}{2}}) + G(q_n)^\top \lambda_n) \\ q_{n+1} &= q_n + \frac{h}{2}(H_p(q_n, p_{n+\frac{1}{2}}) + H_p(q_{n+1}, p_{n+\frac{1}{2}})) \\ 0 &= g(q_{n+1}) \\ p_{n+1} &= p_{n+\frac{1}{2}} - \frac{h}{2}(H_q(q_{n+1}, p_{n+\frac{1}{2}}) + G(q_{n+1})^\top \mu_n) \\ 0 &= G(q_{n+1})^\top H_p(q_{n+1}, p_{n+1}). \end{cases} \quad (3.1)$$

ここで,  $(p_{n+\frac{1}{2}}, \lambda_n, \mu_n) \in \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^m \times \mathbb{R}^m$  は中間変数である.

$M \in \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d$  を正定値として Hamiltonian が  $H(q, p) = U(q) + \frac{1}{2}p^\top M^{-1}p$  という形であるとき, このスキームは次のように書け RATTLE と呼ばれる.

$$\begin{cases} p_{n+\frac{1}{2}} &= p_n - \frac{h}{2}(U_q(q_n) + G(q_n)^\top \lambda_n) \\ q_{n+1} &= q_n + hM^{-1}p_{n+\frac{1}{2}} \\ 0 &= g(q_{n+1}) \\ p_{n+1} &= p_{n+\frac{1}{2}} - \frac{h}{2}(U_q(q_{n+1}) + G(q_{n+1})^\top \mu_n) \\ 0 &= G(q_{n+1})^\top M^{-1}p_{n+1} \end{cases} \quad (3.2)$$

## 参考文献

- [1] Ernst Hairer, Christian Lubich, and Gerhard Wanner. *Geometric Numerical Integration*, volume 31 of *Springer Series in Computational Mathematics*. Springer, Berlin, Heidelberg, 2006.